

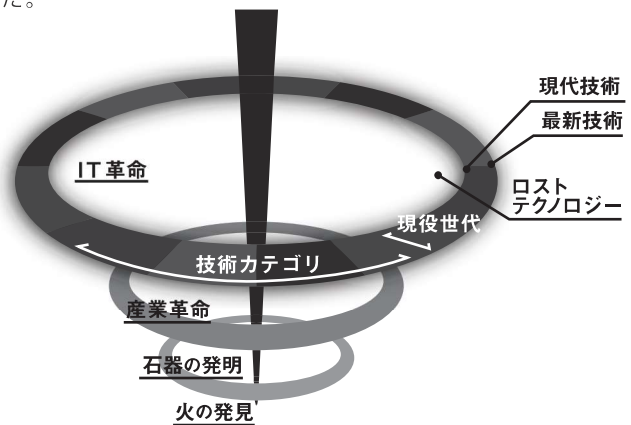
# 「炎重工技報 Vol.2」発行の挨拶

代表取締役 古澤 洋将

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼を申し上げます。本技術機関誌「炎重工技報 Vol.2 2018」の発行にあたり、挨拶を申し上げます。当社は2016年2月に設立し、現在は創立2周年を迎え、3期目の事業年度に入りました。我が国の起業に関する様々な統計調査によれば、景気動向により変動があるものの、起業後3年目における生存率は約62.7%のようです。当社がこの困難を乗り越えられたことは、ひとえに皆様のご指導・ご支援の賜物であると感じております。

さて、人類の社会文化的進化（Sociocultural evolution）を眺めれば、最もインパクトのあった出来事は、火の発見とその利用だったように思います。初期の人類にとって、火は照明となり、暖房となり、そして調理の発明へと繋がりました。野生から徐々に決別した人類は、様々な発明と共に文化を進展させ、今日の複雑な社会が作られてきました。このような事象に着目した米国人の発明家Ray Kurzweilは、1999年に人類の発明の速度や問題解決能力が指数関数的に向上するという、収穫加速の法則（The Law of Accelerating Returns）を提唱しました。

しかし、1人の人間あるいは1つの時代に維持できる知識と技術には、限界があるように思います。収穫加速の法則を三次元的に表現し、ビッグバンのモデル（膨張宇宙論）に重ねれば、火の発見をきっかけとした膨張科学論としてイメージを描くことができます。ここで現代の時間軸から眺めれば、科学分野や技術カテゴリを円に、現役世代の厚さを層とした環状体として表現できます。また優れた技術であっても、その時代の形式知や暗黙知が後世へ継承されなければ、ロストテクノロジーとして失われてきたことも事実です。



ところで、先進諸国のように高度に発達した社会（都市）では、ありとあらゆる労務が自動化され、あるいは代替サービスとして提供され、家庭の中までもビジネス化されてきました。現代の科学技術や社会生活というのは、そこで生きる人々が関与しなくなることによって、これまで人々が持っていた自然や科学に対する知識がどんどん覆い隠され、全く見えにくくなっているのではないのでしょうか。例えば、IHキッチンのある家庭で育った子供は、火の扱い方が分からないということもあるようです。インターネットの普及により、それまでの時代と比べて容易に情報が手に入らようになりましたが、その一方で、きちんと体系化された知と呼べる情報（書籍等）は駆逐されつつあり、簡単に結果が得られる情報が増えては来ているように思います。今世紀にこの傾向がより一層進行し、社会の行き過ぎた最適化が現実となったとき、暗黙知を有し新たな知を生み出せる真の知識階級とそうでない階級の差は、もしかしたら中世の貴族と平民以上の差になるのではないかと危惧をしています。

当社では、自然環境を対象にしたシステムを開発することで、我が国の高齢化によって失われつつある膨大な知恵と知識を形式知へ変換し、新しい事業の創造と次世代への継承に取り組んでいます。炎重工技報 Vol.2 2018 は、汎用自律移動船舶ロボット、生体群制御の海水適用及び分離制御の技術について、それぞれご紹介いたします。ぜひ御高覧頂き、忌憚のないご意見をお寄せ頂ければ幸甚の至りに存じます。より一層の御支援・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、挨拶といたします。